

刺青

今日 あした

【自然の懷に抱かれて贅沢なひと時を】

ネットで検索してこんなキャッチフレーズを見つけた。

「露屋旅館ですって、ここにしましょうよ」

アラフォーの私たち夫婦は子供のいない気楽さもあって（。 。 Travel）で信州の旅館を予約した。

その日は晴天！ ちょうど紅葉の真っ盛りで、コロナ自粛から解放されたこともあり、自慢の電気自動車を飛ばして早々と露屋旅館に着いた。旅館の広い敷地の木々も赤に黄色にと見事に色づいている。

秋は春の花の季節よりもずっと華やかで派手だ。

部屋に案内されると、夫はさっそくビールを冷蔵庫から出して飲み始めた。

「君も一杯どう？」と勧められたが

「私は温泉に入ってからにするわ」と、いそいそと浴衣に着替えた。

「あー、久しぶりの温泉！」

湯船に身を沈めるとガラス越しに見える満天星の生垣と遠景の山々の紅葉、それに真っ青な秋空が絵に描いたようだ。

のぼせるほどお湯につかった後で洗い場の方に目をやると、外の眩しさのせいか、暗くぼんやりとしか見えない。私はおぼつかない足取りでカランの並んでいる一郭に行き腰を落ち着けた。

大きな旅館で広い風呂場には、四角の太い大理石の柱が立っていて、早い時間なのに客はもうすでに何人か体を洗っている。私も桶に湯を張ってタオルを浸し、ごしごしと首から順番に洗い始めた。ふと横を見ると、がっちりとした身体つきの女性が小さな木の腰掛を覆い隠さるばかりに腰を据えている。

その肩から尻に掛けて背中いっぱい龍と牡丹の入れ墨があった。薄暗い風呂場で、外の紅葉とは対照的に、青や臙脂のくすんだ色合

いで細密に施された彫り物は見事で思わず見とれてみると、その女は斜め向こうを向いたまま湯を桶にとつてザーツとかぶった。皮膚は湯をはじくようにさつと乾き、入れ墨が色鮮やかにくつきりと浮かび上がった。龍の鱗や蛇腹が生きているようにうねって見える。私は急に怖くなって、気づかれないうちにそおつと後ずさんで、柱の陰に隠れるようにして風呂場を後にした。

「あれは幽霊？」

夫に話すと

「幽霊なんかいるわけないだろう、真つ昼間に！」

「だって、見たのよ」

刺青の女

現在、露屋旅館のあるこの場所は、一昔前までは人も通わぬような山の中ではあったが、小川が流れ、温泉も湧き出ているので、露の父親は猟に出た時に立ち寄れるようにと山小屋を建てていた。

「露、しばらくはここに隠れている」

ふもとの町で旅館を経営している父親は年に何回か猟に出る。山小屋に近づくとき、辺りを浚うように見回した父は小声で「熊だ」と言う
と鉄砲を構えた。

「ズドン」

弾は命中して大きなツキノワグマがどさつと倒れた。

熊よりも、あたりに気を配って神経を尖らせていた父の方が先に気が付いたのだ。

露は、これからは熊が出ても自分一人で仕留めなくてはならない、と肝に銘じた。父親に出来ることなら自分にだって出来ない筈がない。

露は足を踏ん張って両手を握りしめ、あたりの山や川をあらためて見回した。

「もう日が暮れるから、熊の始末は、露、お前がやれ。そんな彫り物なんかして帰ってきて、みんなおっかながって近寄りもしねえ、しばらくここにいてこれからのことを考えるんだな」

父はそう言うとき、鉄砲を板壁に立てかけて山を下りて行った。

夏の陽は傾きかけている。夜が明ける前に村を出て歩き通しでこの山奥までたどり着いたのだ。

陽があるうちに熊を始末しなければ……。

幼い頃、母を亡くし淋しそうにしている露を、父は背負子に入れて山に連れて来たそうだ。露は余程気に入ったのか、背中を父の背中にあずけ、泣きもしないで景色を見ながら足をばたつかせていたのだという。

父は年にせいぜい五、六回位しか猟には出ないが、行くときには必ず露を連れて行くのが習慣になった。熊を仕留めたらその場でおおよその解体をする。そんな時には必ず骸になった熊に深々と頭を下げる。父と一緒に山に入った露にも、

「頭を下げる。頂いた命だ、粗末にしちゃあなんねえ」と言っていた。

露は久しぶりに入った山小屋にある道具を見回して何種類かの刃物を丹念に選び熊に近づいて、

「命を頂きます」と手を合わせた。

それからつきのわの白い模様の上に包丁を入れ一気に切った。今日はこちらまでだと決めて、暗くなる前に暖炉に火を焚いて持ってきた握り飯を食べた。そして保存してある食料を調べてから眠りについた。次の日もその次の日も……何日もかかって熊の解体が終わると、山小屋にも物置の中にも、毛皮や、燻した肉やら内臓やらがぶら下がった。高価なものだという熊の胆も大事に保管した。

父は熊一頭を露のために置いて行ったのだろう。寒くなる前には里に降りるつもりだが畑も作って置こう。いで湯があるのもありがたい。

小熊が二頭うろついている。父が仕留めた熊の子供だろう。小熊は分かっているのかいないのか、二頭でじゃれあっている。露が声を掛けると警戒心も見せずに近寄って来る。山ブドウを手繰って投げてやると、先を争って食べた。

露は楽しかった。生きるか死ぬかの自然の中で自分が動けばやっただけのことが返って来る。

熊の始末が終わり、畑も耕して一息ついた。

朝の光の中で、温泉の湧き出る小川の水温を確かめて少し掘って出来上がった露天風呂に体を横たえた。

気持ちがいい！

たった一人の山の中でも、近くで火を焚き、鉄砲も置いてある。露はいつでもこんな風に周りに神経を逆立てて注意深く生きている。

大阪にいる時もそうだった。

二十も年上の矢吹に誘われて大阪に行ったのは二十歳の時だった。

矢吹は背が高く、少し猫背で暗い感じのする人だった。常連というわけではないが、実家の旅館に何度か来ていた。ある時冗談とも本気ともつかない調子で、

「しっかり者の別嬪さん、俺の嫁さんにならないか」と口説かれた。

ませていた露は、都会への憧れもあってすぐにのぼせ上ってしまった。親は、矢吹の小指がないことに気が付いて必死で止めたのだがもう露の気持ちは先走っていて聞く耳を持たない。矢吹を追いかけて大阪に行き、所謂極道の妻になったのだった。

矢吹は露の前ではいつも物静かで、ヤクザには見えないし、露に悪事をさせることもなかった。が、家にはいつも五、六人のチンピラが寝泊まりしていた。露は姐さんと呼ばれ、その人たちの身の回りの世話をしていた。

時には出入りがあって若い者が担ぎ込まれることがある。そんな時の露は腹が座っている。

傷を負って腕をブラブラさせ血だらけの若い者が気を失って担ぎ込まれたことがあった。露は血を見ても決してうろたえない。若い者を洗ってやり、消毒してやり、腕を固定し固く包帯で縛ってやった。その後は三日三晩、熱にうなされる若い者に付いていてやった。

ピストルで撃たれた子の弾を、皮膚を切除して取ってやったこともあった。こんな傷を看てくれる医者が間に合わない時もあるのだ。肉に刃を入れる時は、熊も同じだ。丁寧に段取り良く扱った。これも、母のいない露に父親が仕込んでくれた事だった。

矢吹が一度だけ露に無理強いをしたことがある。刺青をしてくれないかと言いだした時だ。龍と虎で、一對の彫り物にしたいと言う。

露は矢吹が自分のことをそれだけ認めてくれているのだと思うと嬉しくて二つ返事で引き受けた。表情をめったに表さない矢吹が嬉しそうな顔をしたのですべて報われた気になった。だがその痛かったこと、痛さに耐えてやり切ったのだから何でもできると思った。

矢吹は生活費を百万単位でくれる。周りには刑務所に行く人も、出入りで殺される人もいるという。露はなるべく儉約して貯金をした。

大阪に来て十年が過ぎようとしている頃、組同士の抗争で矢吹はあつげなく死んでしまった。

露は家の二、三軒が建つほどの貯金だけを持って実家に帰って来た。派手な格好などしたことがなかったので、矢吹の兄弟分には同情されこそすれ、引き止める者はいなかった。

露は矢吹の背中の見慣れた彫り物を思い出す。彫る時に、「引き締まった獐猛な虎にしてくれ」と注文を付けていたが、彫り上がった矢吹に似ていると思った。振り返って顔を正面に向けている虎の構図は静かだが隙のない怖さが見事に表現されていた。

それに比べると露の背中の彫り物は、鏡でしか見ることは出来ないが、牡丹と一緒に描かれているせいか、凄みの感じられない優しい顔をしているように思う。

実家に帰ってきて久しぶりに温泉に入ったらたちまち村中の評判になり、みんな怖がって村八分状態になった。

露は即席の露天風呂で手足をいっぱい伸ばし空を眺めながら、「刺青の何が悪いのよ」とつぶやいた。

だが刺青には矢吹との幸せな思い出しか浮かんでこない。そうだ、誰にも文句を言われない自分の温泉旅館を作ればいいのだ。

あれから四十年。露は立派に温泉旅館を切り盛りしている。父の持ち山を切り開いて莫大な借金をして旅館を作った。どんなに頑張っても入れ墨者には金は貸してくれない。父に社長になってもらい資金を調達した。父はせめて名前を『露屋』にしようと言ってくれた。その父ももういない。

高度経済成長期の頃、旅行ブームの後押しもあって、露は背伸びをして高級旅館のスタイルを作り上げた。

それこそ、わき目もふらず一心に働いた。毎日風呂を掃除する前に一人で温泉に浸かるのは何よりの楽しみだった。刺青のことなんかすっかり忘れていた。

だが、コロナ禍で旅館を閉めざるを得なくなり、何十年かぶりに朝風呂に入り、大きな鏡に映った背中刺青を見て、突然、刺青を意識した。

なんて見事なのだろう。矢吹のために彫った龍はずっと静かに息づいていたのだ。

誰かに見せたい！

誰かに見られたい！

露のなかに欲求が芽生えた。

Go to travelが始まると、また露屋旅館には活気が戻ってきた。

「女将さん、昼間温泉に入るのは止めてくださいよ。この旅館には幽霊が出るんじゃないかって噂が立っていますよ」

完

参考資料

『新極道の妻たち』

家田 莊子

『思いの出のツキノワグマ』

宮澤 正義

『北越雪譜』

鈴木 牧之